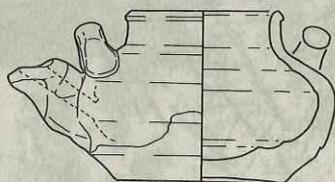


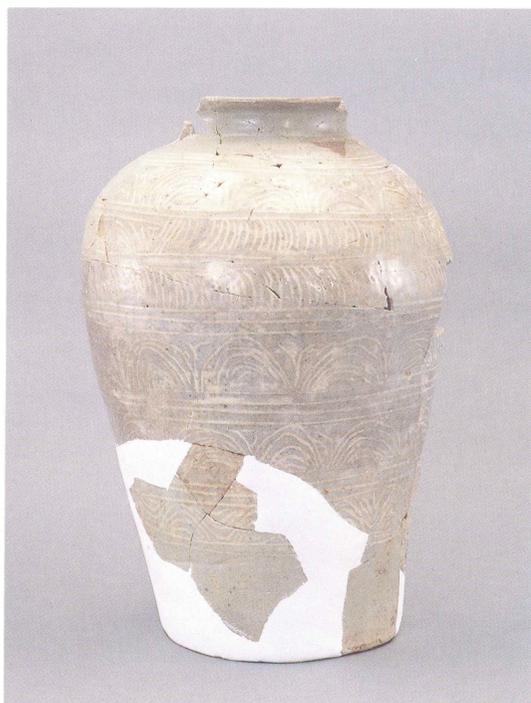
特別史跡

一乘谷朝倉氏遺跡

1993



福井県立一乘谷朝倉氏遺跡資料館



上 第82次出土 粉青沙器壺 下 第83次検出 土蔵

特別史跡

一乘谷朝倉氏遺跡

1993

福井県立一乘谷朝倉氏遺跡資料館

序 文

朝倉氏遺跡の本格的な発掘調査に着手してから20年を過ぎ、ここ数年は今後の史跡公園としての整備計画を方向づける重要な時期にさしかかっています。

本年度は「発掘調査・環境整備事業10ヶ年計画」の7年目にあたり、発掘調査は城戸ノ内の斎藤・川合殿地係りで、ほぼ例年と同様約3,000㎡を調査対象として実施しました。いずれも遺跡の西側山裾に近い地域で武家屋敷跡として残されたところです。

この地域は、朝倉家の重臣たちの大規模な武家屋敷ですが、従来から遺構は比較的少なかった地区です。今回も遺存状態は良くないと予想していたにもかかわらず大きな成果をあげました。

斎藤地係では鑄造関連の重要な遺構が発見され、遺物も多量に出土しました。また川合殿地係の駐車場の北側に隣接する地区では、非常に良好な状態の武家屋敷遺構が発掘され、建物の配置や構成がわかるとともに、蔵の跡では転がし根太の丸太を置いた状況がほぼ完全に残っているなど注目されるものとなりました。これまでの武家屋敷の調査を補完する貴重なもので、改めて朝倉遺跡の重要性を認識させ、将来は環境整備をしてぜひ後世に残したいものです。

なお町並みの立体復原に関する概報は、後日まとめて報告するので今回は掲載しないことにしました。

最後になりましたが、事業の実施にあたり文化庁はじめ関係各位の皆様、地元の方々に大変お世話になりました。心から厚くお礼申しあげます。

平成6年3月

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

館長 貴志 真人

例 言

1. 本書は、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館が平成5年度に実施した国庫補助事業の発掘調査の概要報告である。
2. 平成5年度は、発掘調査中期10ヶ年計画の7年目にあたり、本書には第82・83次調査の概要を収録した。
3. 本書の作成にあたっては調査担当者がそれぞれ分担しておこない。水村伸行が編集を担当した。また、執筆にあたっては各々の項目毎に分担し、文末に文責を記した。

目 次

卷首図版	
序文	
例言	
目次	頁
I. 平成5年度の調査概要	1
II. 第82次調査	
遺構	3
遺物	8
III. 第83次調査	
遺構	12
遺物	19

I. 平成5年度の調査概要

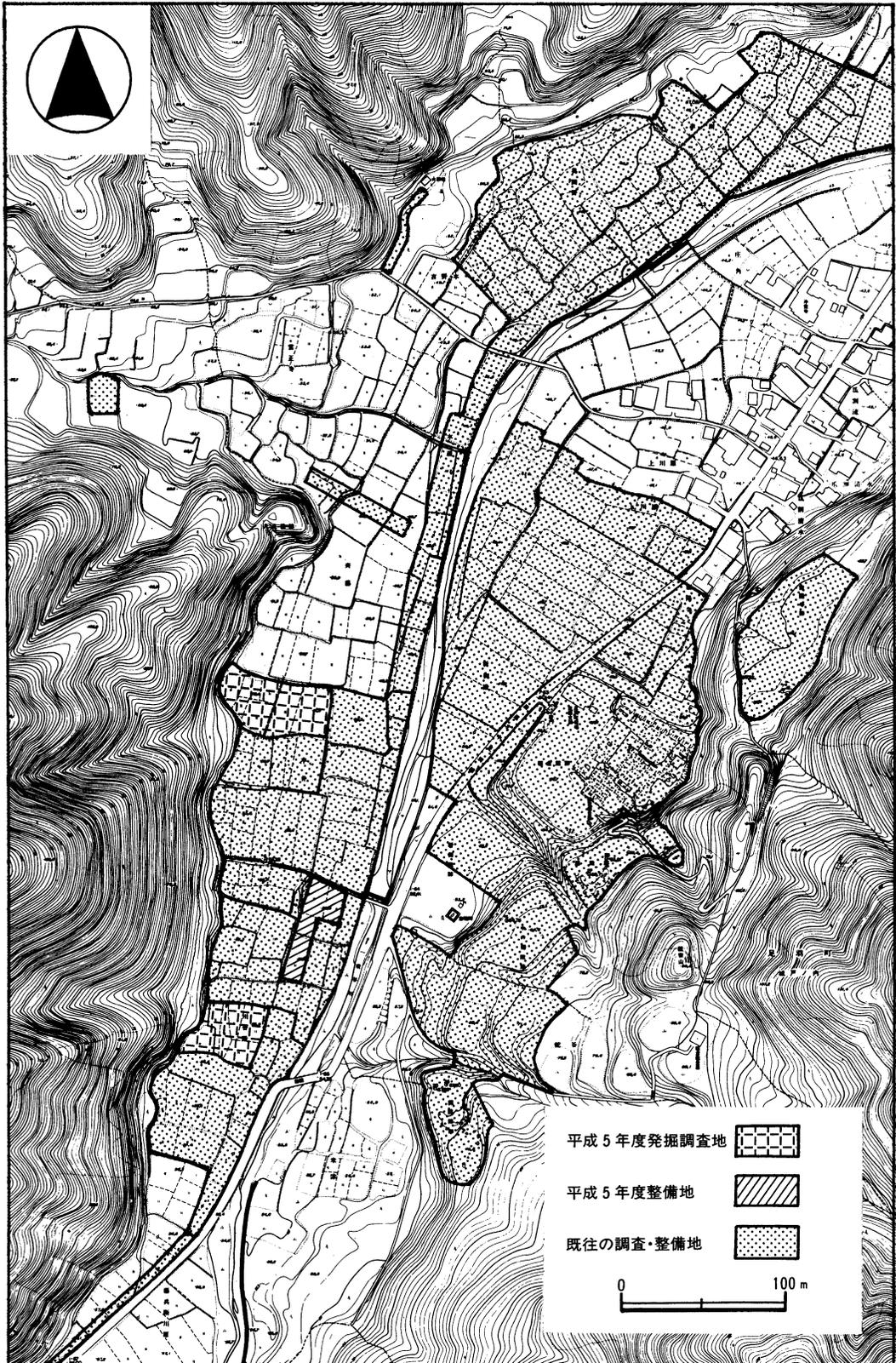
本年度は「発掘調査・環境整備事業中期10カ年計画」の第7年次として、福井市城戸ノ内町字齊藤地係りの約1,920㎡および川合殿地係りの約1,300㎡を調査対象とし、前者を82次、後者を83次とした。調査地区は両者ともに武家屋敷地区に含まれており、それぞれほぼ屋敷1区画ずつの調査地区となった。調査期間は82次が4月1日～8月22日、83次が8月23日～12月25日であり、この間11月30日～12月25日は県道鯖江美山線道路改良工事に伴う緊急調査と並行しておこない、11月17日にはヘリコプターによる航空写真測量を実施した。82次調査区においては削平を受けた所が多く、必ずしも遺構の残りは良好ではなかったものの、屋敷地内の全体像を窺い知ることができた。83次調査区は調査開始以前の予想に比べて全体の遺存状況が良好であり、特に調査区南西隅において検出した蔵遺構は極めて遺存状態が良く、一乗谷朝倉氏遺跡内において複数検出されている同遺構の構造解明に貴重な調査例となった。

また、県道鯖江美山線道路改良工事に伴う緊急調査は、昨年度に引続き特別史跡指定区域外の福井市東新町字御所口で調査をおこなった。遺構の依存状況は昨年と同様に圃場整備により大部分が削平を受けており良好と言える状況ではなかったものの、一部の調査区において石組遺構、砂利敷遺構、溝が検出された。特に石組遺構内よりは多数の自然遺物が出土しており、その分析が待たれるところである。（水村伸行）

調査次数	調査箇所	調査期間	面積	調査理由
82次	城戸ノ内町字齊藤	4月1日～8月22日	1,920㎡	町並立体復元工事に伴う調査
83次	城戸ノ内町字川合殿	8月23日～12月25日	1,300㎡	町並立体復元工事に伴う調査

環境整備箇所	期間	整備事業
城戸ノ内町字川合殿・平井	6年3月31日	「史跡等活用特別事業」による町並立体復元事業

遺物保存処理	4月1日～6年3月31日	鉄製品500点・銅製品300点・木製品350点
--------	--------------	-------------------------



第1図 位置図

II. 第82次調査

本調査は、福井市城戸ノ内町字斉藤地係、約1,920㎡を対象としたものである。調査地は、南北方向道路の西、山裾にあって、この付近に整然と配されている大規模な重臣屋敷の一つと推定されるもので、昭和52年度に発掘調査を実施した第24次調査区の北、第25次調査区の西に位置する。これまでの調査結果や水田区画等から南北約30m、東西約66mの調査区を設定した。調査は、平成5年4月1日に開始し、約4か月を要して遺構検出作業を行ない、同年11月17日に続く第83次調査と合わせて航空写真測量を実施し、遺構平面図を作成した。現在は遺物整理を含めた検討作業中であるが、ここではその概要を報告する。

遺 構 (PL, 1～3)

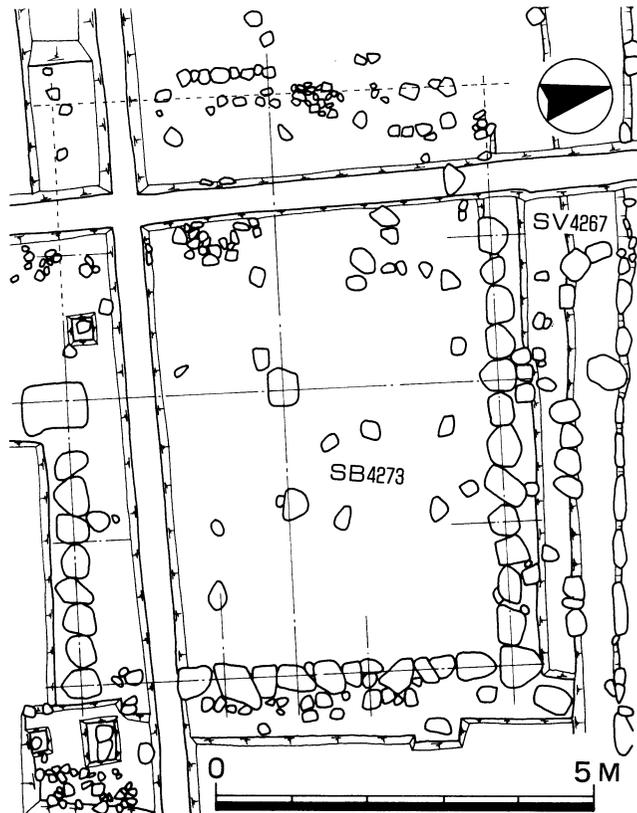
調査区は中央の水田畦畔により大きく2分され、約0.3mの段差が見られ、西の山裾側が高い。東半は2区画、西半は5区画の水田に細分されていた。また、調査区とこの北の水田の間には1.2～1.6mの大きな段差が見られ、ここには西山裾に幅6m、高さ0.6m程の土塁状の高まりも存在する。加えて先の第25次調査においてこの段差の東端で南北方向道路の矩折部も検出されている。調査の結果、削平を受けた所も多く、保存状況は良好とはいえないものの、屋敷の北境界の変遷を示す石垣等や蔵と考えられる建物遺構、鑄造関連の建物と熔炉跡、そして竈跡等の注目すべき遺構を検出した。

以下、その内の主要な遺構について述べる。

S A 4260 屋敷の北の境界となる土塁。西の山裾近くでは北隣の屋敷面から約2mの高さを持ち、幅は3～4mである。この土塁には変遷があったようで、当初は屋敷内の遺構(S X 4293)がこの北面石垣S V 4262まで迫っており、土塁は存在せず、石垣を用いた段差(約0.7m)のみと考えられる。次いでその内側(南)約2.4mの所に石垣S V 940を築き、土塁が設けられたものと考えられる。そして、最終時にはこれに加えて約2.1m南に石垣S V 4261が設けられたと考えられる。この石垣を設ける際に土塁際の石積施設S F 4278が一部壊されたようである。また、この石垣に沿って石組溝S D 4269・4270が存在し、東端には暗渠S Z 914も見られる。同様に北面石垣に沿っても石組溝S D 4268が存在し、この溝は東端で北に折れ、土塁S A 893に沿って約2.7m北上し、暗渠S Z 4319で屋敷外へ排出される。

S B 4273 屋敷の北境界土塁S A 4260に接して中程に存在する建物遺構。最終期の遺構で水田床土上に礎石が一部現れていた。径0.5m程の扁平な石を連続して並べており、これを土台受けとする構造を持つ蔵と推定される。南北は、5.7mで、一乗谷において最も普

遍的な1間を約6.2尺(1.9m)として3間と考えられる。東西は西辺を欠くが4間(約7.6m)の位置に礎石据付け地業と推定される礎石の散布が見られ、また、この南辺ほぼ中央に南へ突出する大きな礎石とこれと相対する北辺にも添石が配され、加えてこの中間にも礎石が据えられている。こうした点から東西は4間と考えてよいものと思われる。また、中央の南北の礎石列は棟通りで、礎石の突出から棟持ちの添柱の存在の可能性も考えられる。なお、これまでの調査においても、こうした土台構造の蔵と推定される建物遺構の例はいくつか知られている。



第2図 SB4273 遺構平面図

SB4274 屋敷の北境界土塁S A 4260に接してやや西寄りに存在する掘立柱の建物遺構。前述した建物SB 4273等の最終期の遺構の整地土で覆われているようで、これらに先行する。東西2間(約3.8m)、南北2.5間(約4.7m)の規模を持つ。柱穴は径0.5m、深さ0.4mで比較的浅い。この西約3mに後述する熔炉が存在し、また、周辺には鋳滓等が見られることから、鑄造等に関連する作業小屋と考えられる。

SX4316 調査区北西部下層で検出された熔炉。径0.5m、深さ0.1mの皿状の落込みがあり、その中央径0.25mのみ黒く焼き締まっていた。そして外周に接するように羽口も検出された。小型の熔炉と考えられる。

SE4275 屋敷の前面土塁S A 892に接して存在する最終期の石組井戸。天端径1.3m、底径1.6mで若干迫り出しが見られる。深さは3.2m。土台は設けず、礫層に直接石を積み上げている。また、底には、松の厚板(厚さ5cm、幅18cm、長さ136cm)を相欠きに組み、1.1m角の溜り部を設ける。また、天端には、長径0.8m程の大きな石を用いる。

SE4276 調査区南西部で検出された石組井戸。天端は破壊され、遺構の整地土で丁寧に覆われており、これらに先行する。内径は1.1m、迫り出しは見られない。深さは3.7m、礫層に径8cm程の松の端太角材を井桁に組み、石を積み上げる。また、この土台の内側に、

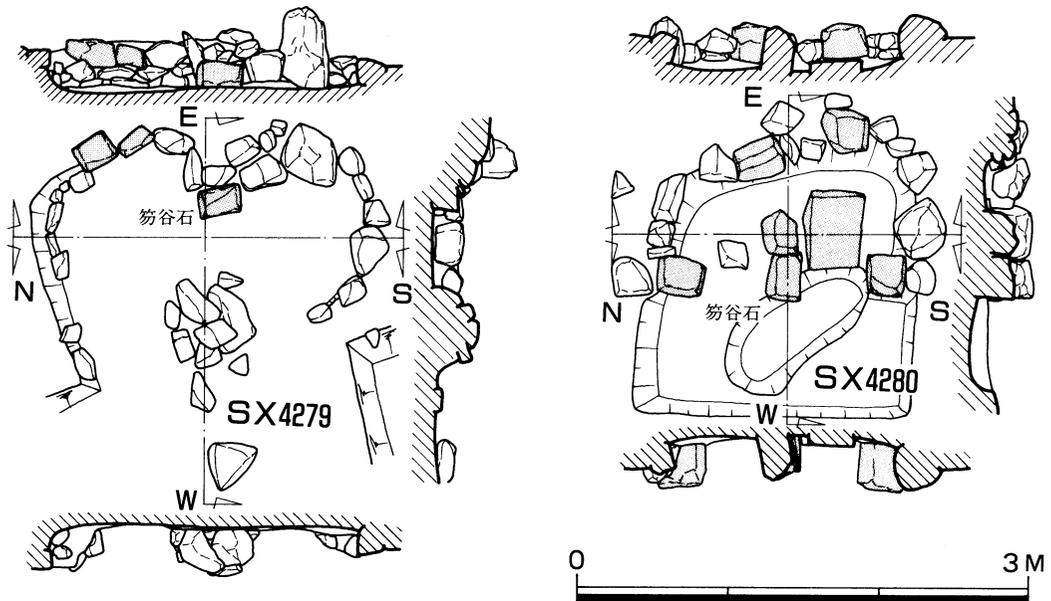
松板（厚さ1.5cm、幅38cm、長さ86cm）を相欠きに組み、0.8m角の溜り部を設ける。

S E 4277 西山裾部で検出された最終期の石組井戸。天端径0.9m、底径1.1mで若干迫り出しが見られる。深さは1.9m、土台は設けず直接礫層に石を積み上げ、溜り部も設けない。天端に長径0.8m程の大きな石を用いる。そして、南脇には石敷が見られる。

S X 4279 調査区東北角部の下層で検出された竈遺構。南北に2穴が並ぶ連房式で、炊き口は西である。内径は北が1m、南が0.8mで若干北が大きい。石を並べてこれを芯とし、土で覆った構造と推定される。石はよく焼けている。笏谷石も用いられている。

S X 4280 調査区南西部で検出された最終期もしくはその前の竈遺構。S X 4279と同じ南北に2穴が並び西を炊き口とする連房式。内径は北が0.6m、南が0.8mで若干南が大きい。やはり石を並べて芯とする構造である。笏谷石を比較的多く用いている。また、南房の炊き口近くの底に0.3m×0.6mの笏谷石を敷く。

最後に全体を概観してまとめに代える。検出した遺構は、土塁S A 4260で述べたように、大きく3期に区分されると考えられる。まず最初は、土塁としての立上り部を持たず石垣S V 4262のみの時期で、これには竈S X 4279が対応するのではなかろうか。ついで幅2.4mの土塁となった時期でこれにはS B 4274に代表される铸造関連の遺構群やS E 4276等が対応する。最終期はS B 4273やS E 4275・4277等が対応する。なお、道路に面する土塁の調査等において、門は検出されていないので、この調査区は、先の第24次調査区と一体と考えられ、門や庭園の位置等から考え、南半は表向、今回の北半は内向の空間に位置付けられよう。そして、この屋敷は敷地間口約60mの大きなものである。（吉岡泰英）



第4図 竈S X 4279・4280詳細図 (1/50)

遺物 (PL. 4~6)

本調査で出土した遺物の総破片数は、36,468点を数える。調査面積が1,920 m²であるから、単位面積当りの出土数は約18.99点/m²となる。この値は当調査地の南、平井地区の山際に並ぶ武家屋敷群と比べて特に多い。ちなみに、3.4点/m²(24次)、4.5点/m²(新馬場)、8.9点/m²(54次)、6.07点/m²(77次)、6.2点/m²(78次)、5.4点/m²(83次)である。この差が生じた原因について、現段階では明確な答を持たないが、一つには南接する武家屋敷(第24次)と本調査区が一体化する段階以降の整地によって移動してきた遺物を含むためとも考えられる。器種構成は表2に示した通りである。

出土傾向を概観すると、皿を主とする土師質土器が83%余りで最も多く、次いで多い越前焼を合わせると地元産で93%余りを占める。以下、中国製陶磁器、瀬戸・美濃焼、瓦質土器その他の順となり、一乗谷における一般的な傾向を示すが、土師質皿の占める割合がやや多い。

越前焼 屋敷の西奥部で大甕5個を埋設したS X 4309が検出された。5個とも口縁部の肥厚したIV群で、(1・2)はその内2基の口縁部である。(8)は、腰部に張りをもち胴部が内湾気味に立ち上がる鉢である。歳S B 4273内の焼土面から出土した。全体に甕、搦鉢類ともIV群が主体であるが、少数ながらI群(3・11)、II群(4・9・10)、III群(5~7・12・13)等も出土した。(14~17)は、甕・壺・搦鉢の破片の周囲を丸く打ち欠き円盤状にしたものである。S E 4275からまとまって出土した。

瀬戸・美濃焼 鉄釉は天目茶碗が大半を占め、灰釉は鉢・皿が碗よりも多い。(18)は、胴に丸みをもち、口縁がわずかに外反する大窯前期の天目茶碗である。深掘りト

器種	破片数	%
越前焼	2,839	
甕	444	
鉢	83	
搦鉢	393	
の	4	
鉢	10	
他		
計	3,773	10.35
瀬戸・美濃焼		
鉄釉	92	
碗	1	
皿	3	
鉢	3	
茶碗	1	
入滴	1	
瓶	18	
その他		
計	119	0.33
灰釉	26	
碗	30	
皿	40	
鉢	2	
皿	8	
その他		
計	106	0.29
土師質	30,265	
皿	4	
血	25	
釜	3	
釜	5	
鉢	12	
その他		
計	30,314	83.12
瓦質	41	
風	11	
瓦	8	
火	83	
その他		
計	143	0.39
珠洲焼	1	
信楽焼	6	0.02
瀬戸焼	1	
小計	34,463	94.50
中国製陶磁器		
青磁	133	
鉢	61	
鉢	26	
盤	46	
香	16	
瓶	5	
その他	10	
計	297	0.82
白磁	4	
碗	261	
皿	16	
鉢	2	
瓶	5	
その他		
計	288	0.79
染付	83	
碗	129	
皿	3	
鉢	4	
その他		
計	219	0.60
その他	2	
小計	806	2.21
朝鮮	42	
象	10	
タ	2	
嵌		
壺		
その他		
計	54	0.15
近世	110	0.30
陶磁器類	35,433	97.16

器種	破片数	%
銅	70	
鉢	3	
筭(こうがい)	2	
針	347	
柄	5	
札	8	
鎌	7	
箸	4	
玉	1	
澤	2	
他	5	
他	75	
計	529	1.45
石製品		
バンド	43	
コ	15	
盤	9	
碗	5	
白	16	
石	53	
他	222	
計	363	1.00
木製品		
漆	1	
折	4	
曲	1	
箸	4	
へ	1	
蓋	1	
木	4	
製	2	
品	28	
他		
計	50	0.14
その他		
羽	3	
壁	31	
炭	17	
片	18	
骨	2	
う	12	
種	10	
そ	10	
他		
計	93	0.25
小計	1,035	2.84
合計	36,468	100

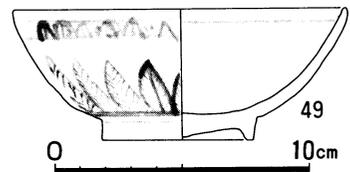
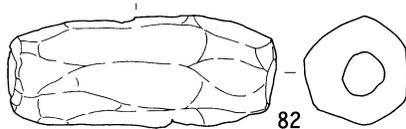
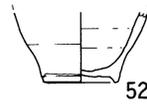
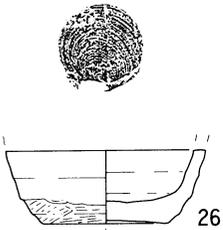
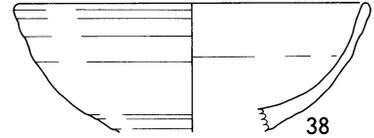
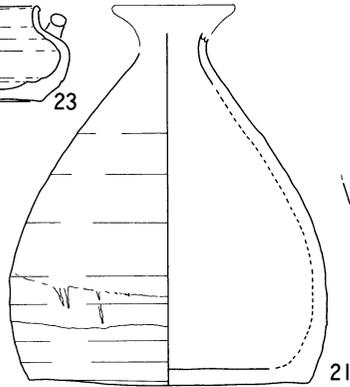
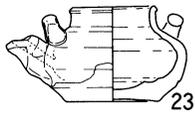
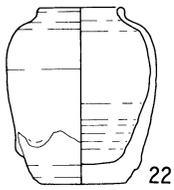
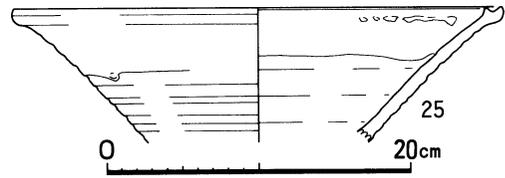
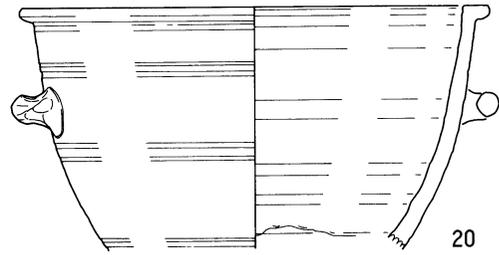
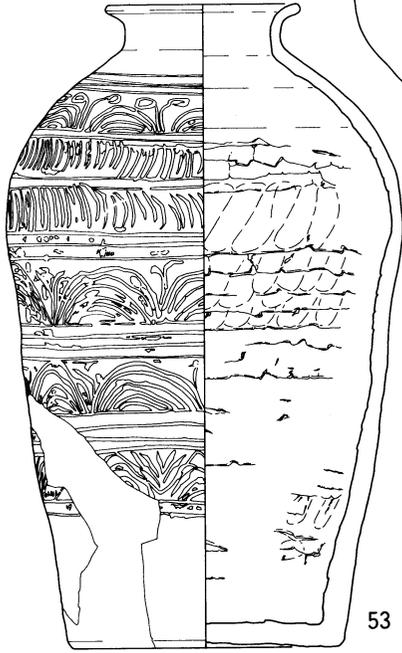
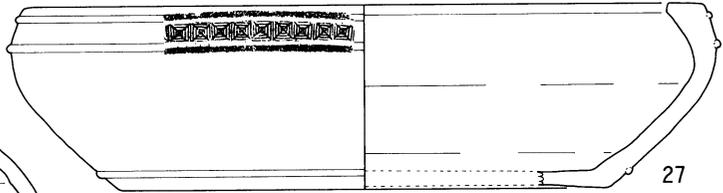
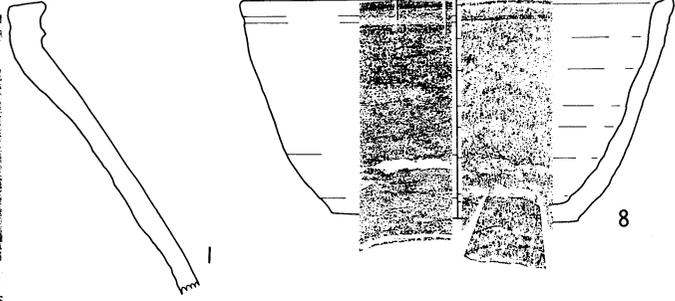
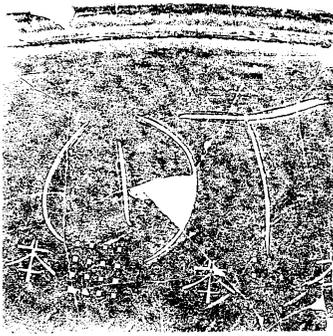
表1 第82次出土遺物組成表

レンチから出土した。(19)は、胴が直線的で口縁のくびれが強い天目茶碗である。(20)は、鉢である。胴部外面には2条1単位の条線を3単位巡らせ、粘土紐による横方向の耳をもつ。口縁部はほぼ水平に外側に折曲げられる。(21)は瓶である。口縁部を欠くほかは完形で、井戸S E 4277から出土した。(22)は茶入である。腰部から回転糸切り痕の残る底部にかけて錆釉が施される。(23)は水注である。腰部から底部にかけて錆釉を施す。(24)は灰釉の碗である。胴部外面にスタンプの蓮弁文を配する。釉は全面に施され、高台内に輪土鎮痕を残す。(25)は口縁内側に蓋受け状の段を持つ鉢である。(26)は壺の底部である。破断面を研磨して口縁とし、小鉢状の器として二次使用している。腰部以下は露胎で、回転糸切り痕の残る底部に花押状の墨書がある。S E 4275から出土した。

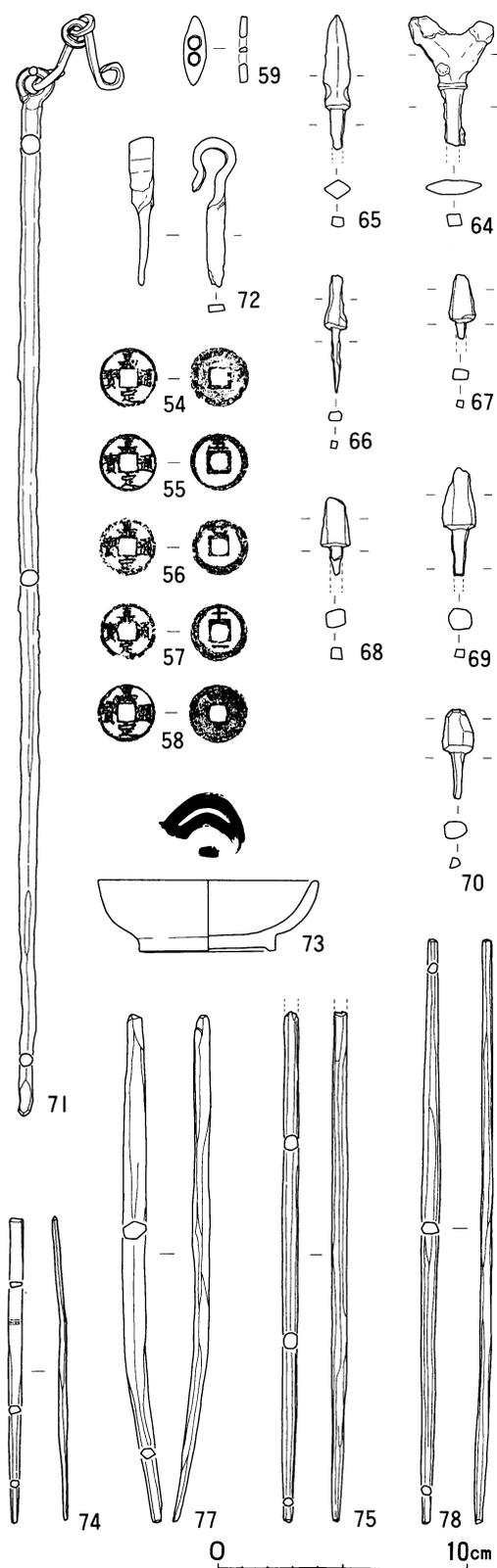
瓦質土器 火鉢や風炉がある。(27)は口縁が内湾する火鉢である。外面肩部に2条、腰部に1条の凸線を配し、肩部の凸線間にスタンプをもつ。(28・29)口縁端部を内に折曲げた角火鉢である。肩部2条の凸線間に巴文、菱文のスタンプをもつ。(30・31)は口縁が直立する角火鉢である。(32)は、肩が張った偏球形の胴から口縁部が直立する風炉である。外面口縁部に桐文のスタンプをもつ。(33・34)は同形の風炉口縁部である。

中国製陶磁器 青磁は碗、染付は皿が多く、白磁は皿が大半を占める。(35)は外面胴部が弱い鎬蓮弁文、(36・37)は線描蓮弁文、(38～40)は無文の碗で、(37・39・40)は内面に印花文が施される。(41)は口縁を菊花状に作る鉢である。(42)は内面見込に印花文、見込脇から口縁部にかけて2条単位の条線を密に配する鉢である。(43)は口縁端部を内側に折曲げた香炉で、外面胴部に算木文をもつ。(44)は瓶の頸部である。(45)は白磁の小皿である。軟質の胎土で、見込の釉は蛇の目状に拭き取られる。(46)はいわゆる桜高台の皿である。(47)は青白磁梅瓶の破片である。(48)は口縁が端反りの染付碗である。口縁部内側は2重界線、外側は2本の界線の間には雷文を配する。外面胴部に線刻の唐草文をもつ。(49)は内面見込に蓮華文、外面口縁部に波濤文、胴部に芭蕉葉文を描く碗である。文様構成と体部のつくりはいわゆる蓮子碗C群と共通するが、見込み中央は僅かに盛り上がり、直立する高台は畳付が水平に切られ、釉を取らずに砂敷で焼かれている。漆による接合痕があり、2次使用している。(50)は碁笥底の皿である。見込み中央の釉の上に鉄分の多い土で魚形を置く。(51)は口縁が内湾気味の皿である。内面にアラベスク、外面に密な唐草文を配する。(52)は瑠璃釉小壺の底部である。外面は高台畳付脇より内が露胎で、内面は灰白色の透明な釉が施される。

朝鮮製陶磁器 (53)は、器高約42.7cmの粉青沙器象嵌壺である。外面は白象嵌による2～4条単位の界線と崩れた蓮弁文や弧状文で6段の文様帯を描く。図示してないが文様帯最上段に「慶尚」とも読める銘がある。周囲を荒く面取された外底部は露胎であるが、粘



第5図 第82次調査遺物(1)



土紐積上痕を残す内面にも施釉される。第24次調査出土の破片と同一個体であった。

金属 (54~58)はSX4317から一括出土した銅銭である。何れも「嘉定通寶」である点特異と言える。(59・60)は鞋である。(61)は8字状銅製金具である。(62・63)は黒漆塗の小札である。前者の長さ約6.3cm、幅約2.4cmである。鉄鎌は鍛造で、𡗗股状の(64)、尖根の(65)、のみ根の(66~70)等が出土した。

(71)はS E 4276出土の火箸である。断面は丸く、輪状に作る頭部にS字状金具を2個繋ぐ。(72)は壺金状の金具である。

木製品 (73)は口縁が内湾する黒漆塗りの皿である。見込には朱色漆で簡略化した扇文を描く。S E 4276から出土した。同井戸からは箸も多数出土した。(74)は小形で、断面を中央から頭部まで平たく、先端に向けては丸く作る。(75・76)は全体の断面を丸く作る。(77~79)は表面の削りが粗く、両端の断面を丸く、中央部の断面を平たく作る。後者のタイプが比較的多い。

その他 (80)は笏谷石製のフイゴ羽口である。炉跡S X 4316に据えられた形で出土した。直径9cm、長さ約15.5cmで、円孔は吹き込み口から焼けただれて鉾滓が付着する吹き出し口にかけて先細りになる。(81)は同遺構から出土した土製の羽口である。(82)は土錘の胴部を面取り断面六角形に作るもので、羽口に転用した可能性もある。

(83)は井戸S E 4276から出土した魚骨片、(84)は同鱗である。

第6図 第82次調査出土遺物(2)

(月輪 泰)

Ⅲ. 第83次調査

本調査は、現在進めている「町並み立体復元事業」の一環として、福井市城戸ノ内町字川合殿地係の約1,300㎡について行なった。期間は平成5年8月23日からはじめ、11月8日に写真撮影、11月17日に航空測量のための写真撮影をおこない、その後補足調査と主要遺構面保護のための埋め戻しを行なって12月25日に終了した。

八地谷から上城戸にかけての一乗谷川西岸は、西の山を背に大規模な武家屋敷が15区画前後並び、有力武将の名前が伝わっている。本調査地区はそのほぼ中央部に位置し、平成3年度に調査した78次調査地区と昭和62年度に調査した第64次調査地区に挟まれる。

遺 構 (P.L. 7~9)

この屋敷の地口は約40mで奥側の幅は30m、奥行は40m以上ある。東と南北両側は土堀で隣屋敷と区画されていた。南側ははっきりしないところがあるが、64次調査のとき、奥側に水田の用水路に使用されている石の面が水路内側に向かず、反対になっているところから、この水路は屋敷を区画する土堀の基礎を利用したものと推定される。屋敷の東側は、直接道路に面しておらず、門S I 4434から東にのびる幅3mの道路S S 1180で、一乗谷川添いを通っていたと推定されると南北方向の道路に結ばれている。

屋敷内は基本的に3面の遺構面からなっていたと考えられ、上からI遺構面、II遺構面III遺構面と呼ぶ。一番上のI遺構面は削平されてほとんど残っていなかったし、最下層のIII遺構面は、II遺構面がよく残っていたので部分的に入れたトレンチでは、ほとんど遺構が残っていなかった。そこで今回は第II遺構面を中心に報告する。

S A 4331 北隣との屋敷を限る土堀基礎で、幅は約1m、長さは35m分のこり、発掘区の西から5m分は石垣が失われていた。上端の高さが揃っていないことからもう一石ほど積まれていたと考えられる。第78次調査地区の屋敷は土堀基礎を挟んで0.2m程度低い。内側は25cm×40cmの石が2段ほど積まれ、外側つまり78次調査側はこれよりも一回り大きい石が積まれている。この付近では土堀基礎を挟んで両屋敷に高低差がある場合は、高い側の屋敷の石垣の石が小さく、低い側の石垣の石が大きい傾向がある。

S A 1181 門S I 4344より北側の土堀基礎である。外側の門付近は70cm×60cmの大きい石で築かれているが、その他の所はそれより小さい石で積まれている。内側はS A 4331付近の一部にしか石が残っていない。この付近で測ると幅は1.3m程ある。

S A 4330 門S I 4344より南側の土堀基礎で、長さは20m、幅1.7m程であろう。内側の石積みはほとんど残っていないが、外側は溝S D 1185の石積としてよく残っている。

S I 4344 この屋敷の門で、S A 4330とS A 1181の間が1.5 m程途切れて内側に3 m×4 mほどの舛型のような空間がある。この空間に東向きにS I 4334は開く。門の規模は小さく、門の柱の間隔が1.8 m (6尺)しかない。門の踏石は上面が平らで高さも揃っている。

S I 4345 先の空間に対して西向きに開く門で、S D 4333を跨いで入る格好になる。S D 4333の溝石の高さが揃っており、一段あがった踏み石は薄い笏谷石の板でできている。門の建物S B 4343については、一方の礎石が失われていて規模がはっきりしないが、踏み石の規模からS B 4342と同じく6尺であろう。

ひとつの屋敷にふたつの門があることについては、溝S D 4333によってふたつの屋敷に別れることも考えられるが、奥の方の溝の状態を考えるとやはりこの調査地区全体でひとつの屋敷としたほうが良いと判断される。

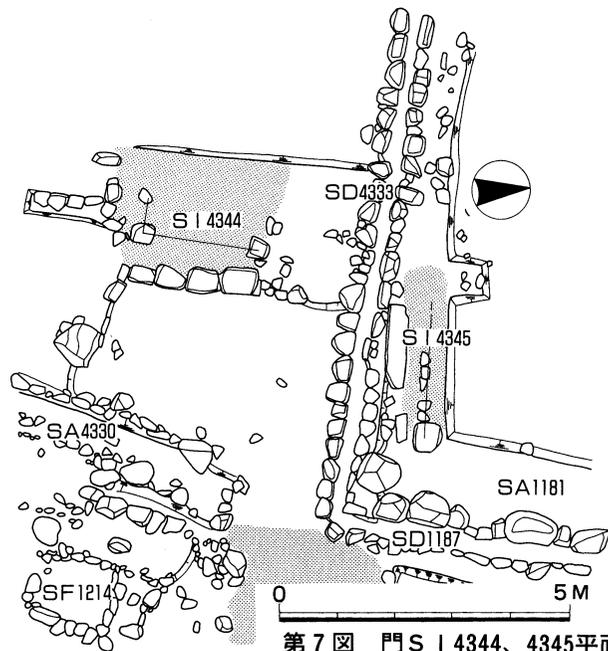
S D 4333 屋敷中央を東西に貫く石組の溝である。蔵S B 4341の北側から屋敷東のS D 1187につながる。この溝にS D 4334～4337までの溝がつながる。溝のなかは、蔵付近をのぞいて、II遺構面を覆っていた焼土で埋まっていた。

S A 4332 屋敷内部を区画する土塀である。門S I 4345から西へ8 mだけ延び、溝S D 4333の溝石と共通している。基礎の幅は約1 mある。

S S 4381 溝S D 4333の南に位置し、屋敷を東西に貫く砂利敷の通路である。南の境がはっきりしないが、幅は4 mちかい。全体に赤い焼土で覆われていた。

S B 4338 この屋敷の中心的な礎石建物である。屋敷北半の中央に位置し、規模は東西12.27 m (6.5間)×南北13.25 m (7間)ある。柱間寸法は、6尺2寸5分を基準としている。

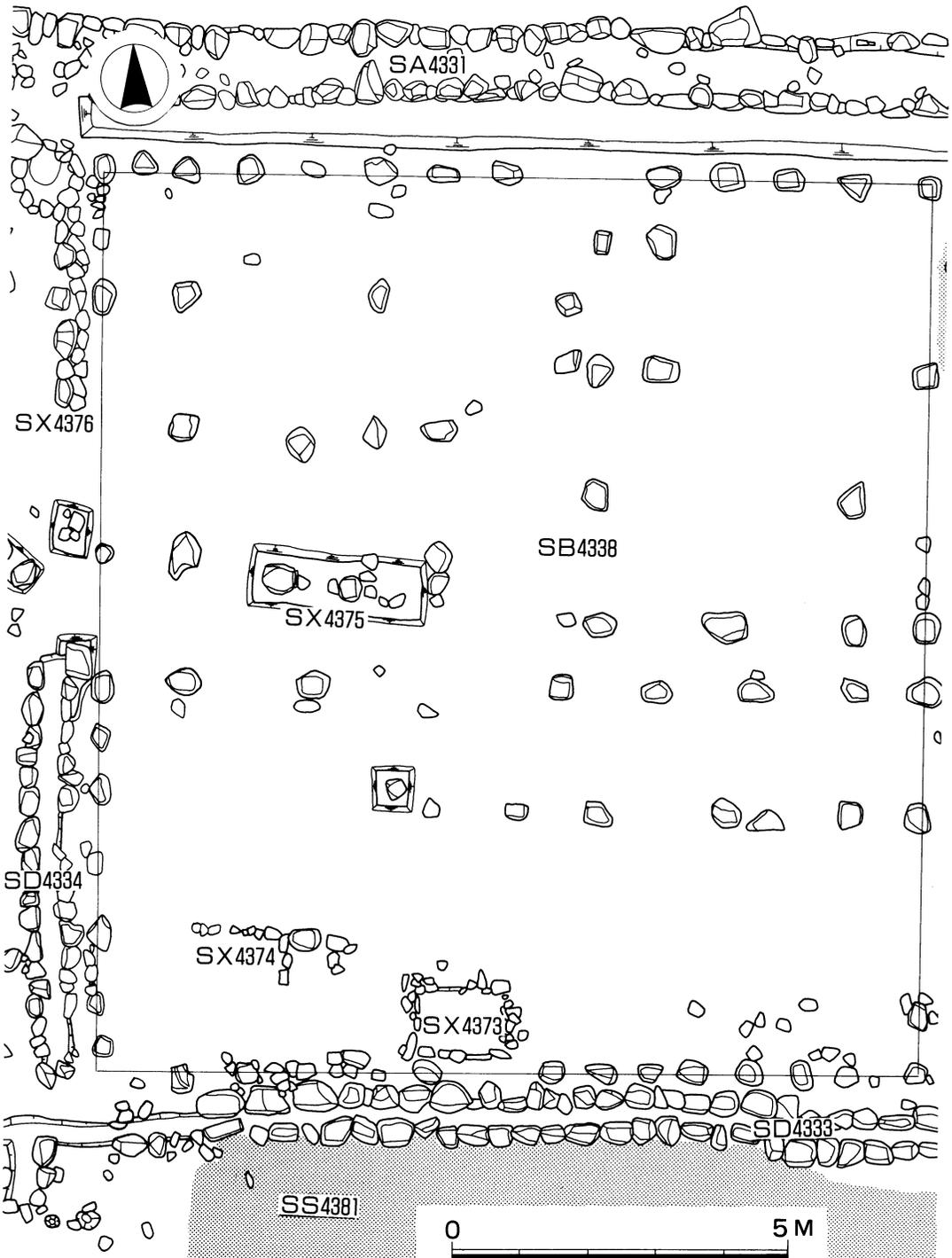
礎石列の東西方向は、南北端と西端の礎石列は半間おきに並び、南北方向は南から第3列目の礎石列が通っているが、中程の礎石列の間隔が0.6 m程しかない。これに対して西側第1礎石列と第2礎石列は3.79 mすなわち2間分ある。この2間分の空間には灰の詰まった浅いS X 4337があったり、



第7図 門S I 4344、4345平面図

石列状のS X4374があり、この部分は底で土間だった可能性がある。またこの建物に関連する施設として、建物の西側に石敷S X4376、雨落とし溝S D4334がある。

S G4366 礎石建物S B4338の東北角に位置する平庭である。3.5m×3 m四方の範囲に大豆大の白い砂が敷詰められ、中央北寄りの位置に1.2m×0.8m程の平らな石が据えられ



第8図 礎石建物S B4338平面図

ている。西北寄りに蹲らしき石群がある。敷砂の東端に直径0.2mほどのピットが2つ開く（S X4371）。間隔は1.2mほどで、おそらくこの庭園に入る簡単な門のような施設だったのでろう。

S B 4339 主屋とみられるS B 4338の東に位置する礎石建物である。礎石の残存状態が良くないので規模などについては不明である。S B 4338は、土堀S A 4331の西半分に規制されているのに対し、S B 4339は、S A 4331の東半分と方向が一致している。

S F 4348 東土堀基礎の脇に位置する石積遺構で、0.7m×1.2m、深さ0.5mある。内部は底の方に黒灰色の土で埋まっていたが、特に有機質が多かったわけではない。

S F 4350・4351 北土堀基礎の西端近くに位置する石組み遺構である。規模は0.7m×0.8mあり、深さは0.2mと浅い。内部は焼土がつまっていた。S F 4351はS F 4350の西に位置する石積み遺構で、規模は0.7m×0.7m、深さ0.3mある。内部はS F 4350と同じく焼土がつまっていた。

S E 4347 礎石建物S B 4338の西、4mの所に位置する直径1m弱の井戸である。底まで掘れなかったが、上面から1.5mまでは山土で埋められており、焼土は見当らなかった。井戸の周辺は堅く砂利が敷き詰められている。また、この井戸に付属する洗いの排水として溝S D 4335が付く。

S B 4341 発掘区西端で見つかった土蔵である。この屋敷を東西に貫く石組溝S D 4333の南に位置する。土蔵本体の規模は、東西5m×南北6.2mある。この蔵は湿気を防ぐため周囲より一段高くつくられ、北を除く3面に幅0.9mの石敷の犬走りが付く。犬走りを含めた規模は、東西7.2m×南北5.8mである。南面の入り口より西と西面の犬走りは土を亀の甲状に高く固めた状態になっていた。南面中央にある入り口は正面に大きい踏み石があり、入り口の石が「ハ」状に開いて配置されているところから、外側に開く観音扉が付いていたと考えられる。また、土蔵の壁は、厚を示す石が残っていたことから30cm（1尺）で、外側は当然ながら柱の見えない大壁、内側は柱が見える真壁であったことがわかった。内部は砂利敷になっていた。その砂利が半間おき南北方向に切れている部分があり、ここには転根太があり、その上に床が張られていたと考えられる。また、この砂利敷の下には石が敷き詰められており、おそらく何らかの事情で石敷の床が下がったため砂利を敷きなおして床を張ったのだらう。南側に崩れ落ちていた多量の焼土の下から炭化した茅が多数見つかった。このことから屋根は茅葺で、おそらく、漆喰で固めた土蔵の上に茅葺きの屋根を載せた状態だったのでろう。土蔵の西側には入り口まで石敷S X 4357が付く。土蔵遺構の残存状態は極めて良かったが、納められていた品物は一つ残っていなかった。

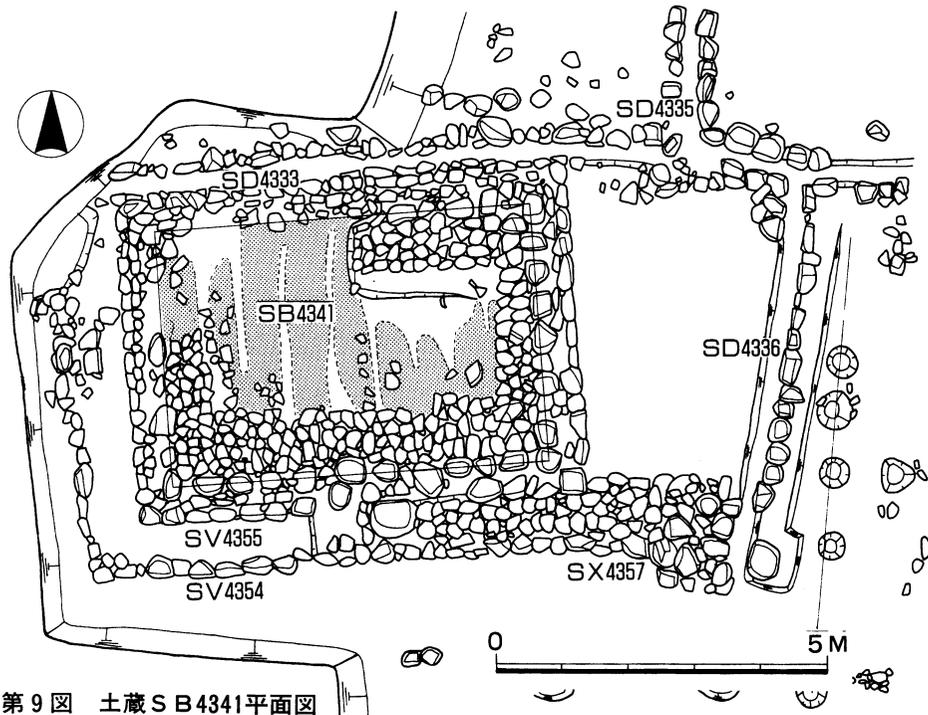
S A 4362 土蔵のすぐ東に位置する掘立の柵列である。溝S D 4333から溝S D 4336と平行

に12m分検出された。柵列より東にある台所的な部分と蔵とを区画する柵列である。

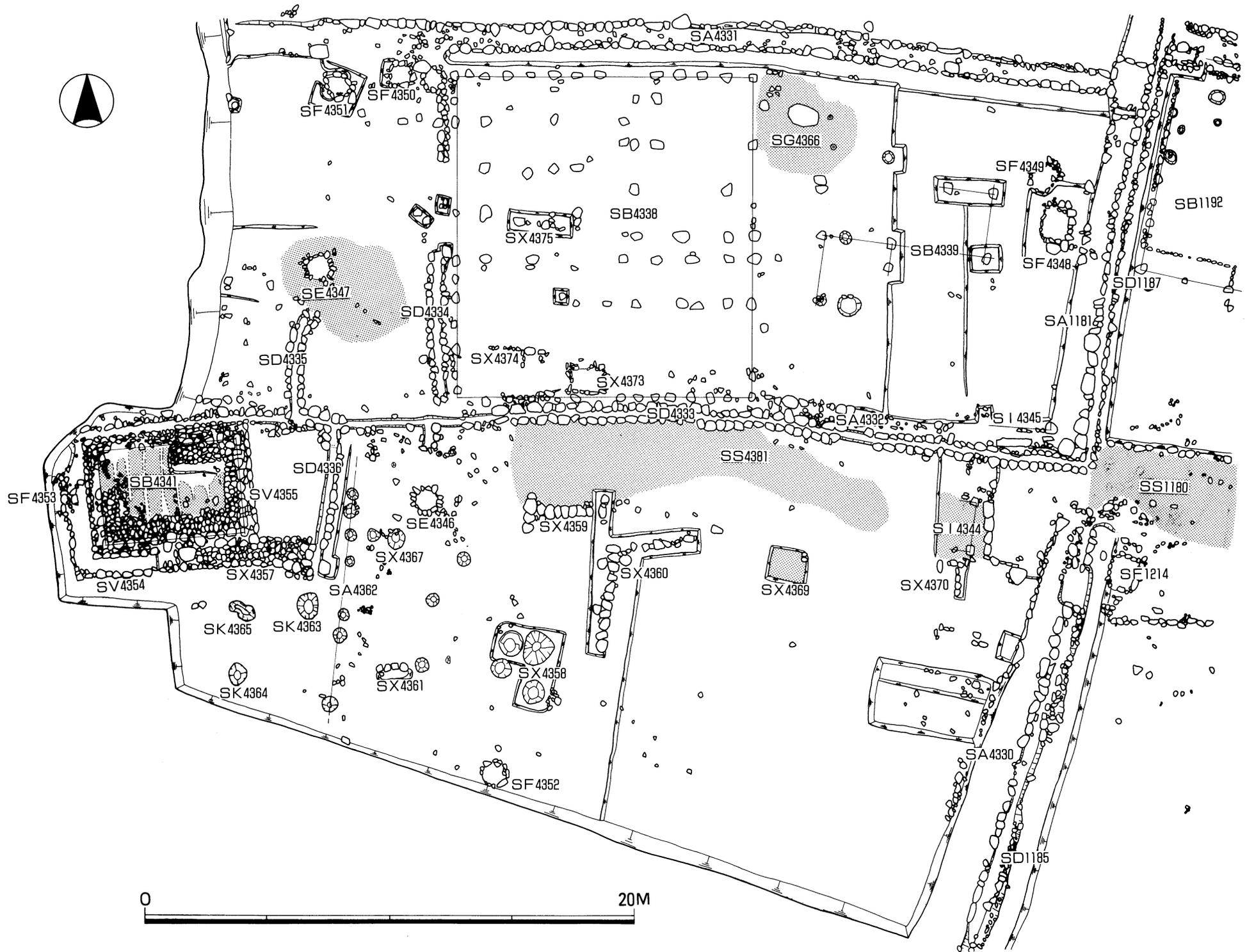
S X 4358 越前焼甕が4基埋められていた跡である。北側2基のうち1基は越前焼大甕が埋まっており、もう1基は抜き取られていた。南側の2基は、抜き取り穴が小さいことや、付近に散乱していた越前焼甕の破片から口縁部が立ち上がる甕と口縁断面が三角のずんぐりした甕が埋設されていたと考えられる。なお、大甕の内部には黒く炭化した膜状の物が付着していた。

S E 4346 通路S S 4381の西端付近に位置する井戸である。この井戸も底まで完掘していない。上端から1.5mまでは山土で埋められていた。すぐ南にあるS X 4367は、中に黒い灰が埋まっていたことから何らかの火を使う炉のような施設と考えられる。また、S X 4368には灰と魚の骨のようなものが詰まっていた。こうしたことからこの付近は、建物跡は見つからなかったが、この屋敷の台所と推定した。

川合殿・平井地区にある山側の武家屋敷は大規模ではあるが遺構の残存状況が悪く、これまで5区画調査してきたが、屋敷の構成がわかる屋敷はなかった。しかし今回の第83次調査地区は、ほぼ中央に門があり、この門を境に溝と塀で南北に2分され、北側は主屋が建つ晴れの場、南側は台所や蔵が建つ裏方の場といえよう。「新馬場」や24次調査地区も屋敷中央を東西方向にはしる溝や柵列で屋敷を2分している。「新馬場」の場合北半分は台所があり、晴れの場と裏方の場の位置が逆になっている。こうした違いはあるが屋敷を中央で大きく2分することは大規模屋敷のひとつのパターンと認められる。(岩田隆)



第9図 土蔵SB4341平面図



第10図 第83次調査全測図

遺物 (P.L. 10~11)

本調査区における出土遺物の総点数は7,068点であり、面積約1,300㎡の平米あたりの密度は5.4点/㎡となる。これは一乗谷における出土傾向のうち最低に近い密度に属する。しかし、本調査区がほぼ一軒分の武家屋敷であることから、この数値が決して低いものと言いきれるものではない。(小野正敏「福井県一乗谷における陶磁器の組成と機能分担」『貿易陶磁研究』No.4 1984年) 出土遺物の内訳については、表2を参照して頂きたい。

出土遺物のうち図示したものは全て包含層出土のものであり、遺構内より出土したものは極少量の小破片であることから図示されていない。以下に代表的なものについて述べることとする。

越前焼 越前焼には甕、壺、播鉢、卸皿、鉢が認められる。甕(83)はⅣ群bに属し(「越前焼大甕・播鉢の分類」『県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』1983年 以下、大甕、播鉢の分類はこれによる。)口径85.7cm、器高92cm、最大径95cmを測る。容量は首部までで376.2769ℓ、口縁部までで396.0978ℓを量ることから2石用の甕であったと想定される。(荻野敏春氏の計測、教示による。)(84)もⅣ群bに属する大甕の破片である。この他、図示し得なかった大甕片にはⅢ群に属するものも認められる。(85)は口径35cm

		破片数	%	
日 本 製 陶 器	越前焼	甕	1,375	
		壺	424	
		播鉢	114	
		鉢	222	
		その他	1	
	計	2,136	30.3	
	瀬戸・美濃	鉄釉	碗	57
			茶播鉢	5
		灰釉	鉢	1
			壺	33
その他			4	
計	100	1.4		
土師質	碗	皿	7	
		鉢	30	
	鉢	鉢	35	
		壺	3	
		その他	3	
計	78	1.1		
計	178	2.5		
瓦	鉢	鉢	3,301	
		釜	8	
	その他	羽	1	
		その他	1	
		計	3,310	46.9
その他	鉢	鉢	2	
		燈	1	
	その他	風	9	
		香	3	
		その他	18	
計	33	0.5		
その他	信	須	49	
		恵	2	
	不	明	6	
		計	5,714	80.9

表2 第83次出土遺物組成表

中 国 製 陶 磁 器	青磁	碗	90	
		皿	72	
		鉢	13	
		盤	15	
		その他	15	
	計	209	3.0	
	白磁	皿	540	
		杯	10	
		その他	11	
	計	561	7.9	
染付磁器	碗	65		
	皿	150		
	杯	6		
	その他	1		
	計	222	3.1	
計	992	14.0		
朝鮮製陶磁器	碗	13		
	皿	3		
	鉢	3		
	その他	13		
	計	32	0.4	
計	6,738	95.0		

金 属 石 製 品 木 製 品 そ の 他	銅	銭	24	
	銅	製品	3	
	飾り	金具	1	
	釘	柄	69	
	小	柄	1	
	鉄	鍋	1	
	その他	その他	39	
	計	138	2.0	
	石製	バンドコ	74	
		火打ち石	8	
白		6		
砥石		9		
硯		7		
石製	碁石	19		
	盤	14		
	その他	17		
	計	154	2.2	
	木製品	加工木	4	
計		4	0.1	
その他	壁土	17		
	骨	6		
	その他	2		
計	7,059	100		

を測り、(86)は口径32.3cmを測る。肩部に↑のヘラ記号を持つ。壺(82)は口径9cmを測る。播鉢(79)は内面全面に8条を1単位とする播目を有する。(80)はⅢ群aに分類されるものであり、12条を1単位とする播目を有する。この他、図示し得なかった播鉢片にはⅣ群に分類されるものも認められる。(81)は卸皿である。鉢(87)は口径25.5cm、器高11.5cmを測り、片口がつく。内面はよく使いこんでいる。

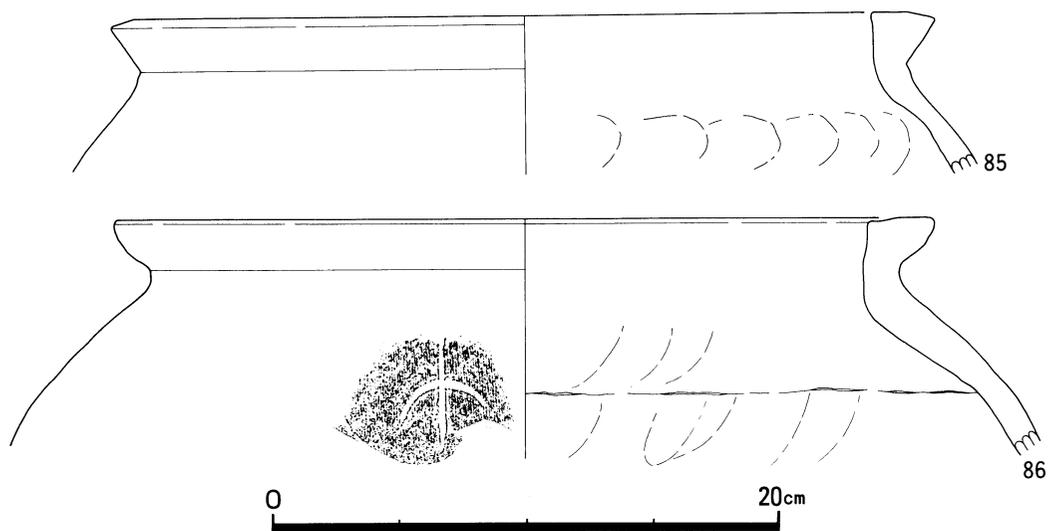
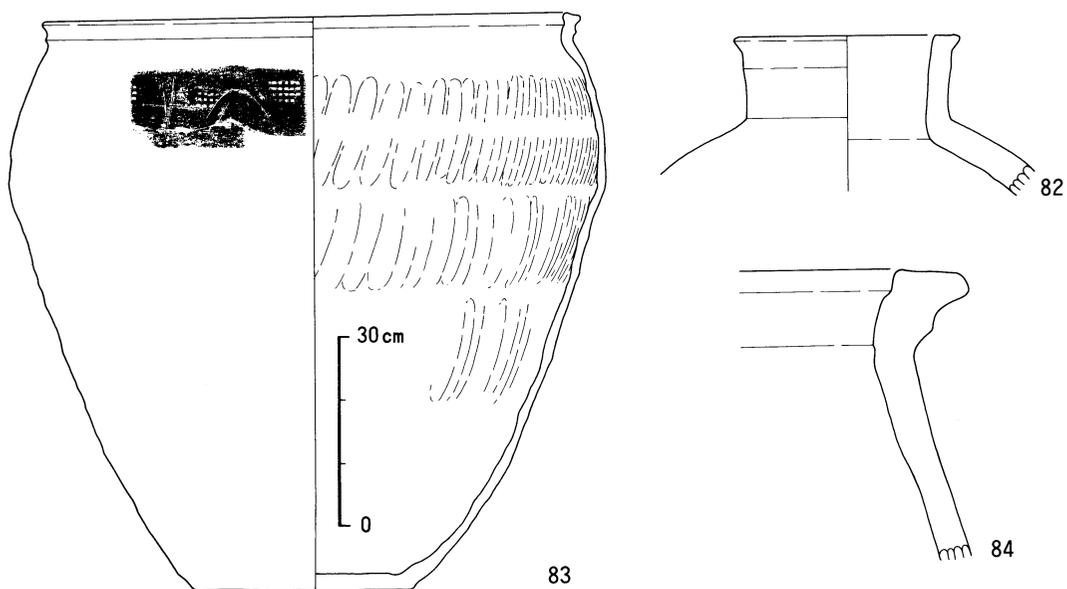
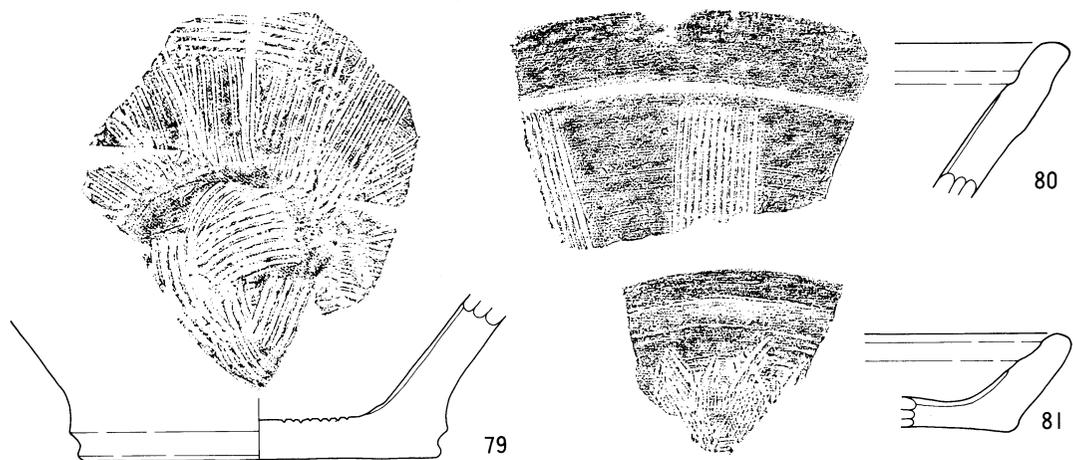
土師質土器 土師質土器には皿および羽釜が認められるが、羽釜は小破片のため図示されていない。(88)は口径21.8cm、器高3.3cmを測るA類(「土師質土器」『朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ』1979年 以下、土師質土器皿の分類はこれによる。)であり、(89)は口径11.4cm、器高2.3cmを測るA類である。(90~91)はC類であり、(90)は口径8.8cm、器高1.9cmを測り、(91)は口径9.1cm、器高2.1cmを測る。また、(92)は口径6cm、器高2cmを測る。

瓦質土器 (93)は口径12cmを測る香炉であり、体部上方に弱い波状線を有する。

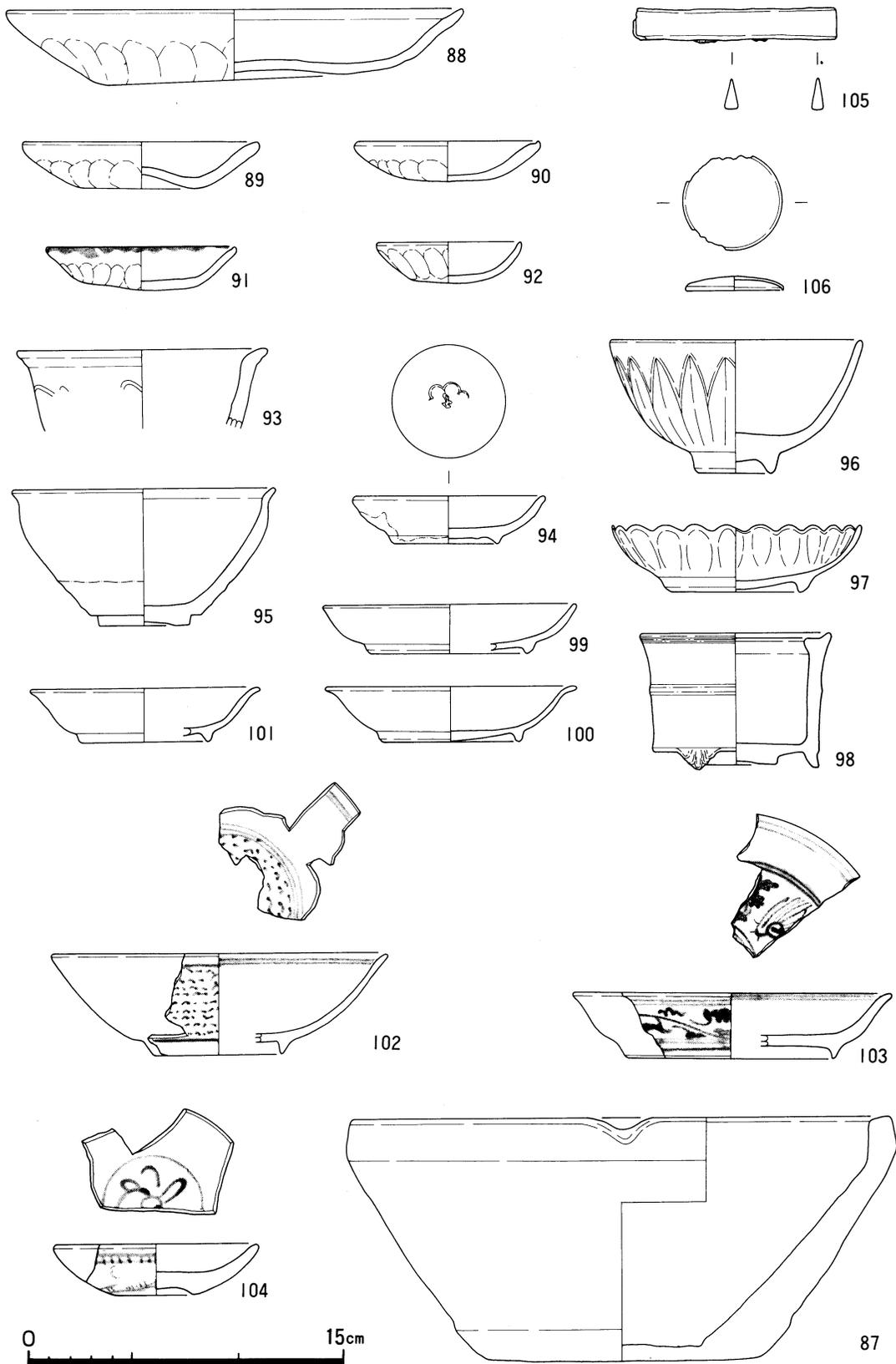
瀬戸・美濃焼 瀬戸・美濃焼の製品のうち鉄釉碗の占める割合は大きい、大部分が同一のタイプに属するものである。(95)は口径12.5cm、器高6.5cmを測る。体部下半から高台周辺には錆釉が施されている。(94)は口径9.2cm、器高2.3cmを測る丸皿であり、断面三角形の付高台を有し、底部内面には印花文が押印される。

中国製陶磁器 (96~98)は青磁である。(96)は口径12cm、器高6.3cmを測る碗である。体部外面には鎬蓮弁文を有する。畳付は釉を削りとり露胎となっている。(97)は口縁が、波形になった内湾する輪花皿であり口径11.8cm、器高3.2cmを測る。高台部は砂高台である。(98)は口径9cm、器高6.5cmを測る香炉である。(99~101)は白磁皿である。(99)は口縁部が内湾するタイプであり、口径12cm、器高2.3cmを測る。畳付は露胎である。(100)は口径12cm、器高2.6cmを測る端反りタイプであり、畳付は釉を削りとり露胎となっている。砂高台である。(101)は口径11cm、器高2.6cmを測る端反りタイプである。畳付は釉を削りとり露胎となっており、砂高台である。(102~104)は染付である。(102)は碗であり口径16cm、器高4.8cmを測る。C群(小野正敏「15,16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2 1982年 以下、染付の分類はこれによる。)である。体部外面および底部内面には唐草文の退化型式と考えられる文様を有する。(103)は皿B₁群であり口径15cm、器高3.1を測る。体部外面には宝相華唐草文を有する。(104)は皿C群であり口径9.7cm、器高2.4cmを測る。体部外面には波濤文および芭蕉葉文の退化型式を描き、底部内面にはねじ花文の退化型式を描いている。

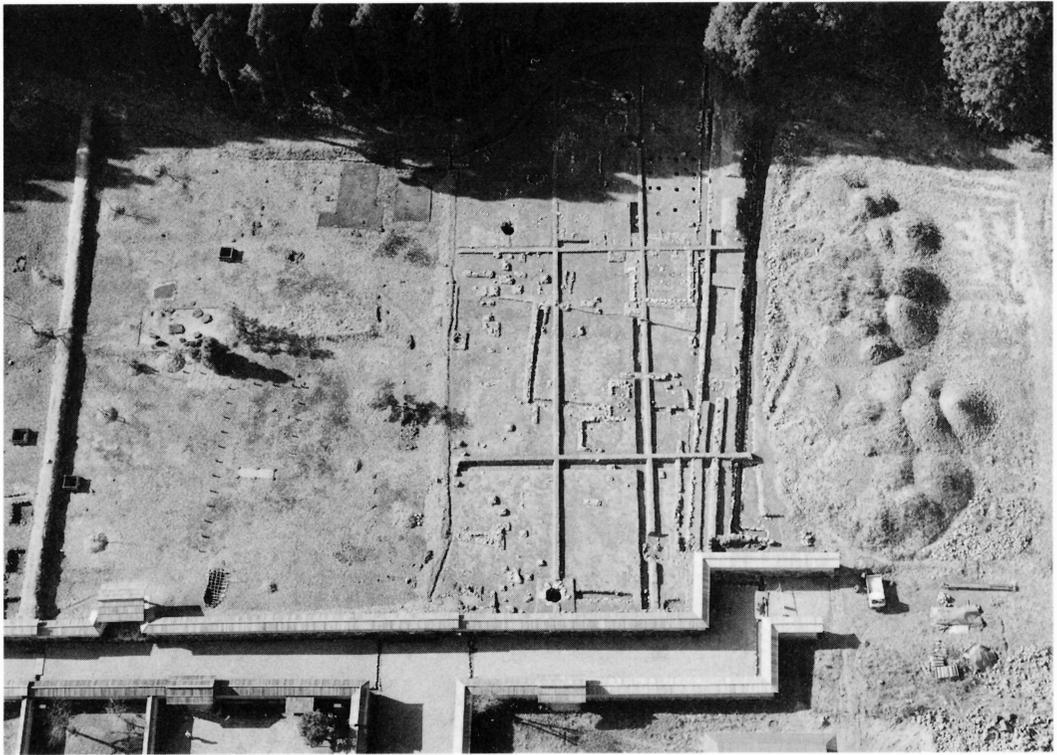
金属製品 (105)は小柄であり、柄の部分は銅製である。残存長9.6cm、幅1.4cmを測る。(106)は口径4.6cmを測る銅製の蓋であるが、身とのセット関係は不明である。(水村伸行)



第11図 第83次調査遺物(1)



第12図 第83次調査遺物(2)



全 景（東上空から）



同 上（北西から）



調査区東半部（南から）



調査区西半部（南から）



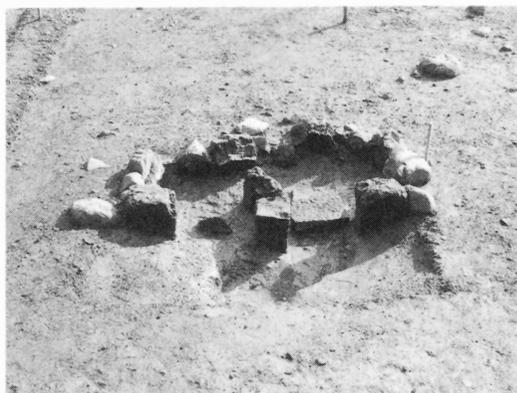
S B 4273(東から)



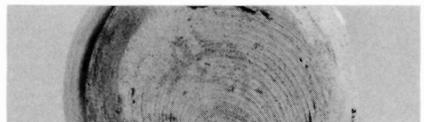
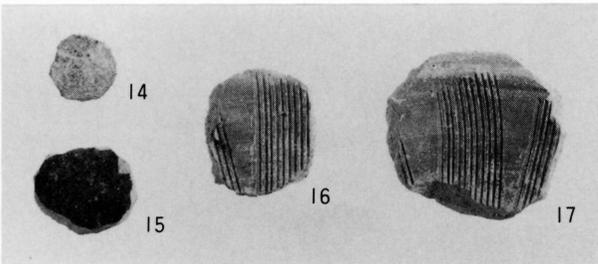
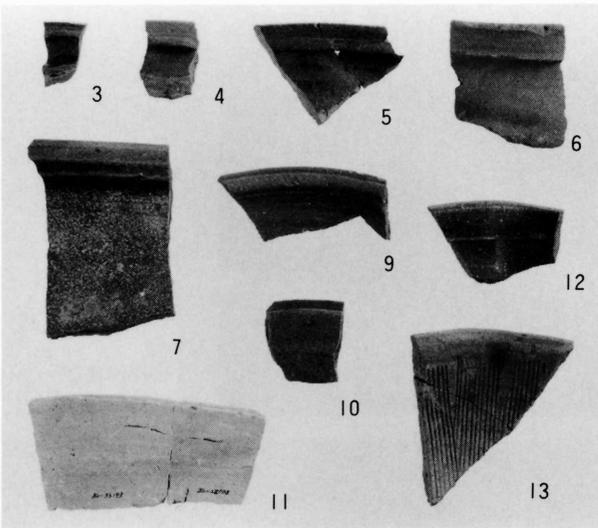
S B 4274及び
S X 4316(東から)



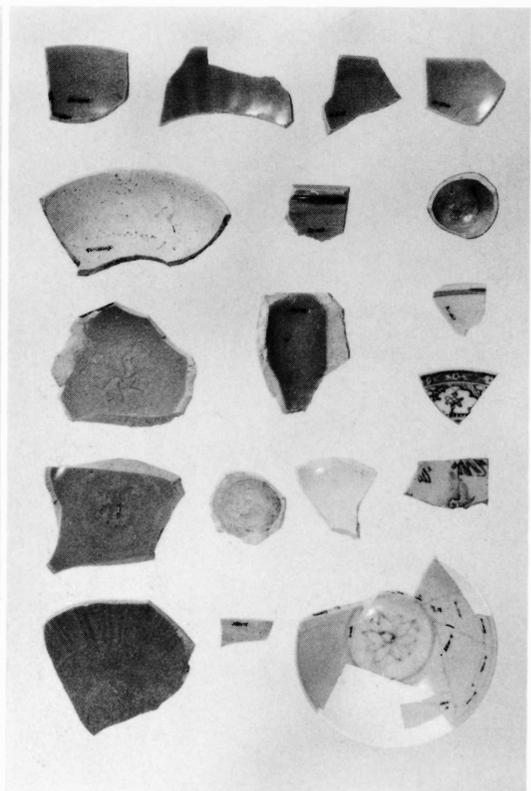
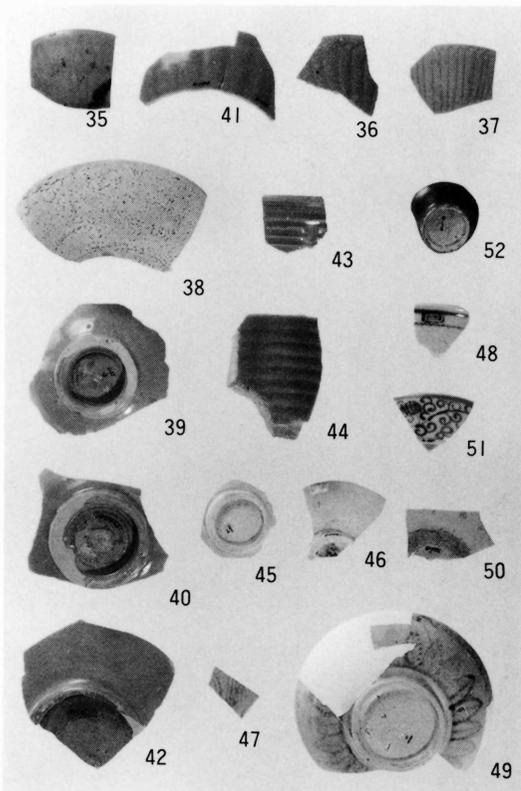
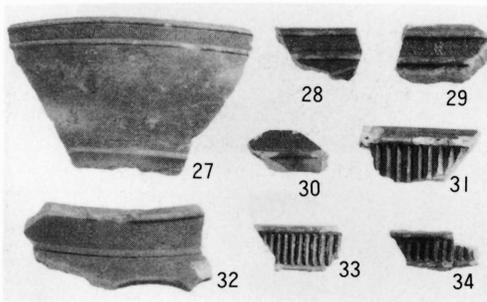
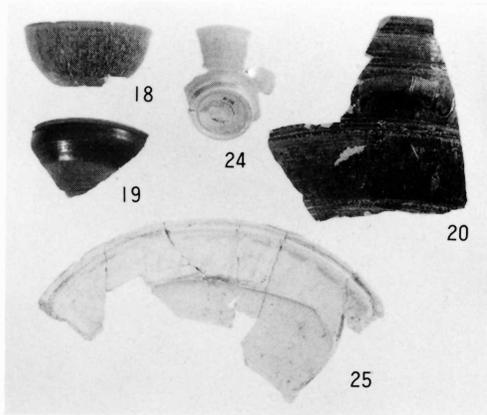
S X 4279(西から)



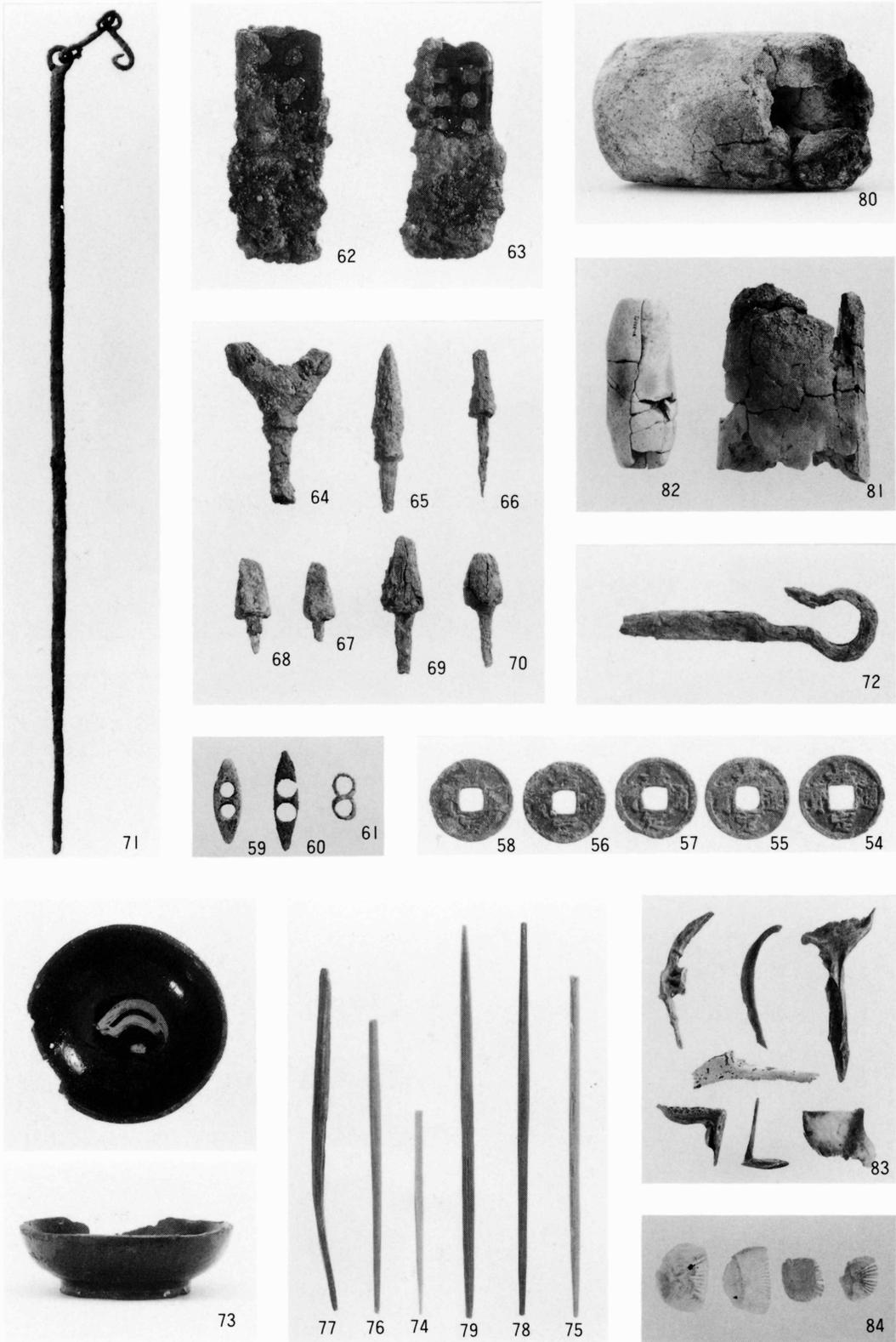
S X 4280(西から)



越前焼 甕 1 ~ 7 · 14 · 15 鉢 8 ~ 10 播鉢 11 ~ 13 · 16 · 17 瀬戸・美濃鉄釉瓶 21 同茶入 22 同水注 23 灰釉壺 26



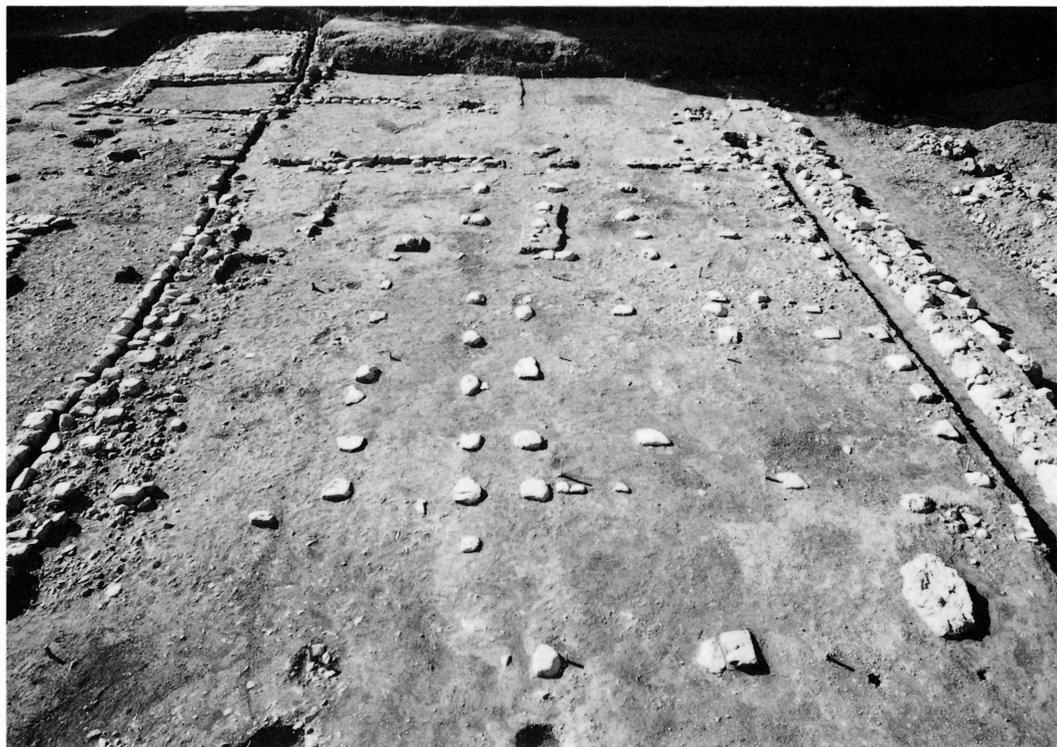
瀬戸・美濃鉄釉碗18・19 同鉢20 灰釉碗24 同鉢25 瓦質火鉢27～31 風炉32～34 中国製陶磁器
 青磁碗35～40 同鉢41・42 同香炉43 同瓶44 白磁皿45・46 青白磁梅瓶47 染付碗48・49 同皿50・51
 瑠璃釉壺52 朝鮮製陶磁器 象嵌壺53



金属 銅銭54～58 靴59・60 銅製金具61 小札62・63 鉄鎌64～70 火箸71 鉄製金具72
 木製品 漆器皿73 箸74～79 その他 羽口80～82 魚骨83 鱗84



調査地区全景(東から)



礎石建物S B4338(東から)



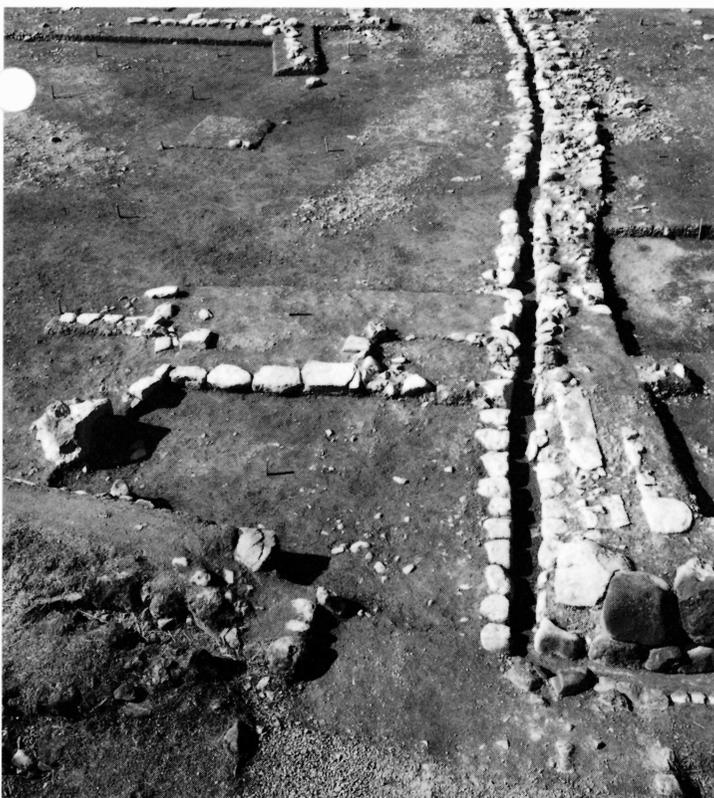
礎石建物 S B 4338（西から）



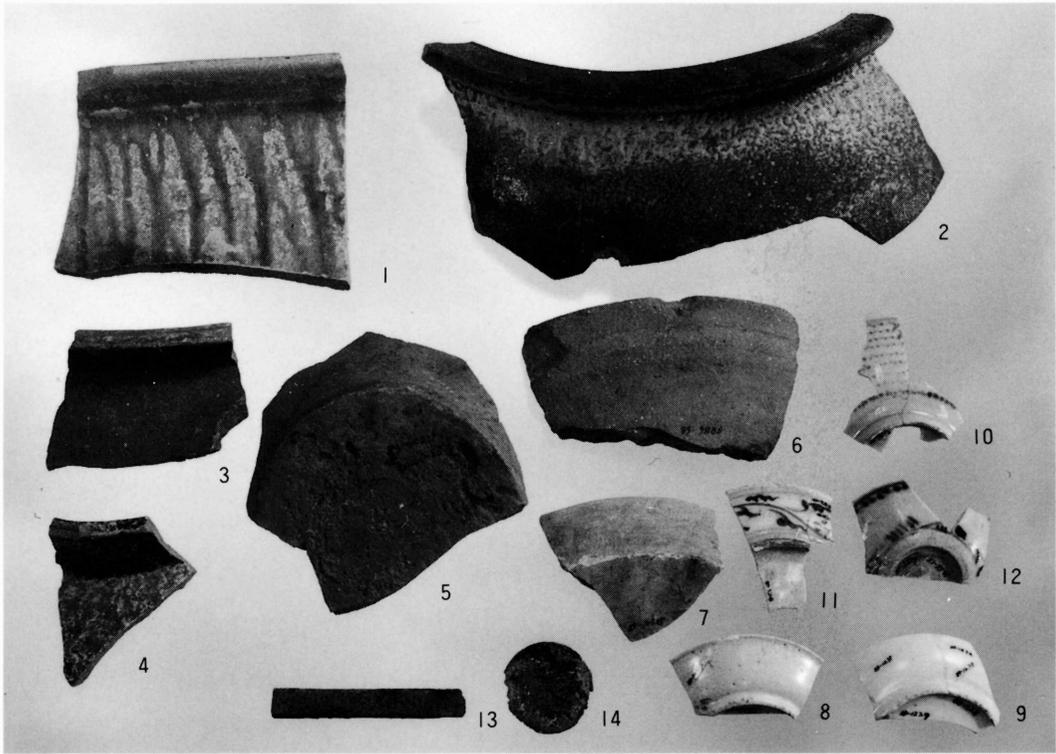
土蔵 S B 4341（南から）



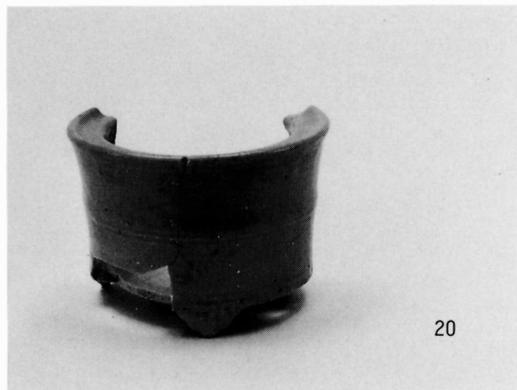
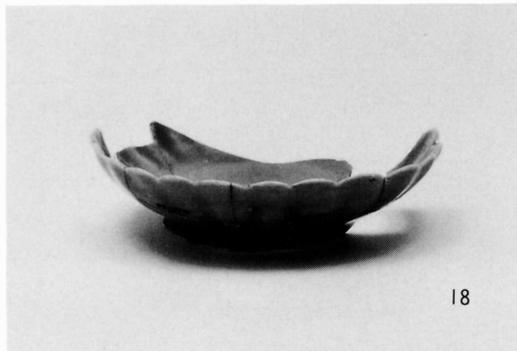
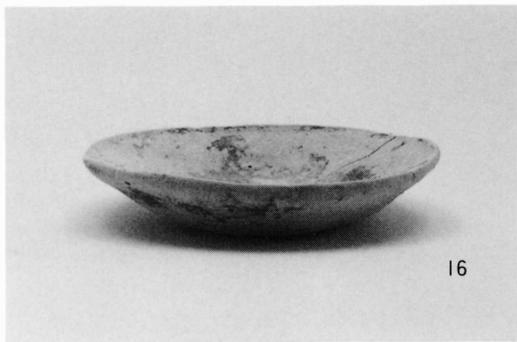
上 推定台所付近
（東から）



左 門S I 4344
門S I 4345
溝S D4333
（東から）



越前焼甕 1～3 壺 4 播鉢 5～6 卸皿 7 中国製陶磁器 白磁皿 8～9 染付碗 10 同皿 11～12
 金属小柄 13 蓋 14



土師質土器15~16 瀬戸・美濃焼皿17 鉄釉碗19 中国製陶磁器青磁皿18 同香炉20 越前焼鉢21 甕22

特別史跡

一乘谷朝倉氏遺跡

平成5年度発掘調査環境整備事業概要(25)

発行年月日 平成6年3月31日

編集・発行 福井県立一乘谷朝倉氏遺跡資料館©

印刷 河和田屋印刷株式会社